とある未来のお話。

s0711201

時は２５００年。世界の技術が飛躍的な進歩を遂げ、サイバー社会と言われる時代が始まった。町には東京タワーをはるかに上回る高層ビルが立ち並び、車からはタイヤが消え、地面から発する磁力で浮かび上がり、オートパイロットで目的地まで操縦される。ＡＩが進歩したことにより様々な企業から人類は姿を消し、人類は身の回りを機械で固め、自分にとって快適で堕落した生活を送っていた。

そんな日々に嫌気がさし、生活に必要最小限の機械のみを使ったアナログ生活をする２人の少年がいた。彼らは、廃校となり今は使われていない大学跡地に住み着き生活していた。この日も少年Ａが食糧調達のため近くの工場に侵入。いつも通りの素早く手慣れた侵入であった。そこでＡはスクラップになっている見慣れないアンドロイドを見つけ、何かに使えないかと持ち帰ることにした。

Ａ「ただいま。珍しいもの見つけたよ！何か役に立つパーツないかな？」
Ｂ「おお、アンドロイドか！そういえば最近電子レンジの調子悪いから丁度良かった。」
　Ａ「じゃあ、アンドロイド型電子レンジにでも改造出来るか？」

ガン、ガン、カチチ、カチチ・・・。機械に強い少年Ｂが簡単に改造を終えた。

　Ａ「さすが！これで温かい飯がくえるな！試しに使ってみるか。」
　Ｂ「ちなみに音声認識機能付きにしたから指示すれば勝手に温めてくれるよ。たしか冷凍チキンがあったから温めてみよう。」
　Ａ「お前そんなことまで出来るのか！よし、あのチキンよろしく。」
　アンドロイド「カ、カシコ・・・マリマシタ。」

・・・ウィーン、ウィーン、ガチャ・・・バタン。
・・・ビービービービー、ボン！

　Ｂ「おい何した？」
　Ａ「何も、俺は温めるように頼んだだけで・・・。ってあれ？チキンここにあるけど。」
　Ｂ「あれ？スパナがないけど？」
　Ａ「まさか・・・」
アンドロイド「ジ、ジジ、ジ・・ンニュウ・・・シャハッケン！３７号機攻撃ヲ開始シマス。」
Ａ「おい、今なんて言った？」
Ｂ「ま、まさかこのアンドロイド、対地球外生命体のため造られた・・・いでえぇっ！」
Ａ「とりあえず逃げろ！俺があいつを引きつけるからお前は何か対処法を考えてくれ！」

　２人はその場から別々に逃げた。ここ大学内には侵入者撃退用のトラップが様々なところに仕掛けられており、Ａはそのトラップを駆使しながら逃げるがアンドロイドを停めるまでには至らず。以前鬼ごっこが続く。

　Ａ「ウソだろ！鉄球でも火炎放射でもビクともしないってどういうことだよ？もうＢの頭に任せるしかないな。とりあえず時間稼ぎだ！」

そのころＢは。
Ｂ「くそっ！いい案が出てこない・・・Ａ無事かな・・・。ダメだ、集中！」

少年Ｂはパニックに落ち入り、なかなか良い対処法が浮かばない。

　Ｂ「あぁぁ、どうしよう。あいつ何万ボルトの電流ならショートするかな・・・、あ、でも電流源がない。くそ堅い合金で出来てるから衝撃あたえても無意味だし・・・、何か、何かないか！ああぁあぁあ」

・・・ドゴーン！

　Ａ「こんなところにいたのか！何か浮かんだか？」
　Ｂ「バカヤロウ！タイミング悪い！来るの早い！何にも浮かんでねーっての！」
　Ａ「な、どうすんだよ、この状況！」
　Ｂ「知るかよ！とりあえず逃げろ！」

二人の少年は汗だくになりながら逃げる・・・逃げる・・・逃げ回る。二人の体力もギリギリ。気力のみで逃げる。

　Ａ「あ・・も・・無理、限界。」
　Ｂ「バカ死ぬぞ！」
　Ａ「もう、俺が犠牲になるからお前だけでも逃げろ。」
　Ｂ「おい、バカ！」

ＡはＢを逃がすため自らアンドロイドに捕まった。

　Ｂ「あのバカ。くそ！俺は何も出来ないのか？くそ！でもあいつの犠牲を無駄にはしない！俺だけでも生き延びるしかない。」

Ｂはこみ上げる気持ちを押し殺し、逃げようとした瞬間・・・

　Ａ「ちょっと待った～！！！こ、こいつ・・・背中にスイッチ付いてらー！」
と、Ａが。

　Ｂ「・・・。そこだけアナログかーーーい！」
と、Ｂが。

　Ａ「くさっ！何だこのガスは！まさか毒ガスか？」
　Ｂ「待ってろ、今助ける。もう２人とも生き延びるにはそのスイッチを切るしかない！」
　Ａ「な、何だ？こいつまだ何か書いてあるぞ。こ、コックローチキラー？」
　Ｂ「あぁ、最近発売された対ゴキブリ用アンドロイドのこと？って、そいつコックロ—チキラーなの！？」

Ａ「誰だ！こいつを対地球外生命体のって言ったのはよー！ふざけんなよ！」
Ｂ「よし！じゃ・・・スイッチ切っちゃお！」

パチッ☆

こうして、２人の少年の平和は守られた。アンドロイドは以前電子レンジとして活躍しているが、音声機能はＢの手によって削除された。２人の物語はこれからも続くかもしれない・・・。